（様式２－２）

Ⅰ　学校の概要

読解力向上推進モデル校事業　　**まんのう町立高篠小学校**

◆児童数及び教員数

〇児童数

第１学年	第２学年	第３学年	第４学年	第５学年	第６学年	特別支援	全　校
１学級 ２３名	１学級 ９名	１学級 １７名	１学級 ２３名	１学級 ２９名	１学級 ２１名	３学級 ７名	９学級 １２９名

〇教員数　　１５名

◆学校の特色

本校は、学校目標に「自ら学び　なかまと共に　たくましく生きる子どもの育成」を掲げ、子どもたちがしっかりと考えて学習できるよう、日々の教育活動に取り組んでいる。しかし、令和７年２月に実施した「標準学力調査」の本校の子どもたちの国語と算数の学力においては、第１学年時から下降していく傾向も見られ、全国平均を大きく上回ることはできておらず、学力を向上できているとはいいがたい。一つ一つの授業を大切にし、基礎基本の定着を図るとともに、考える力を育み、学んだことを活用していくことができるような授業を、「教師のしかけ作り」から目指す必要がある。

Ⅱ　研究主題等

研究主題　　**主体的に考え、行動する児童の育成**

－「テキストを理解し、利用し、熟考する」、教師の「しかけ作り」－

◆研究主題設定の理由

本校の児童は、素直で様々なことに真剣に取り組むが、その姿勢は受け身的であり、「主体的に考え、行動する」力を付けることが不可欠である。「主体的に考え、行動する児童の育成」を、まずは授業を通して行いたい。児童にとって授業が魅力的であり、楽しいものであるならば、自ずと主体的に考えるはずである。そのためには、教師が「しかけて待つ」必要がある。「読解力」を「課題解決のために集められた情報に示されたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」と捉え、教師の「しかけ作り」を、連続型テキスト及び非連続型テキストを用いて、熟考させるという点から行う。「熟考」は、「主体的に考え、行動する」力につながるものであり、さらに主体的な学びは、学力向上につながると考える。

◆研究内容及び方法

（１）教科の枠組みを超えた「読解力」について、教師の共通理解を行う

「読解力」をキーワードに、各教科等で子どもたちが身に付けるべき力について共通理解を図り、目指す子どもの姿を具体的にしていく。

「読解力」については、髙木展郎氏の著書「『読解力』（Reading Literacy）の育成　『探求』の基盤となる資質・能力」によると、以下のように四層構造で説明される。

第一層	発信された内容を、発信者の意図に沿って、その意を外すことなく受け取り、それを（そのまま）表出する力
第二層	発信者が発信したテキスト（文章や表、図等）から、意図を含めた内容を受信し、受信者の思考判断等を加え、理解したり評価したりした内容を表出する力
第三層	受信したテキストの中から受信者が必要とする内容を探し出し、自らの経験等に引き付けて解釈し熟考したことを、評価や判断をして表出する力
第四層	無限の情報の中から受信者の状況に引き付けて情報を探し出し、必要なテキストの内容を受信し、自らの経験等に引き付けて解釈し熟考したうえで自らの考えの成熟を図り、新たな価値や考えを創出する力

髙木展郎「『読解力』(Reading Literacy）の育成　『探求』の基盤となる資質・能力」より

上記を参考に、本校では「読解力」を「課題解決のために集められた情報に示されたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」と定義した。具体的には、「文章や表、図等を見て、その意味を理解し、理解したことの中から必要なものを取り出して使い、自分の経験等と合わせて、考えを作り出す（それを表現する）力」である。

（２）「テキストを理解し、利用し、熟考する」、教師の「しかけ作り」

子どもたちが授業の中で、「テキストを理解し、利用し、熟考する」ためには、教師の「しかけ作り」が必要だと考える。その際、子どもたちの学びを「見通し―行動―振り返り」の３つの場面に分けて「しかけ作り」をしていく。(図１参照)

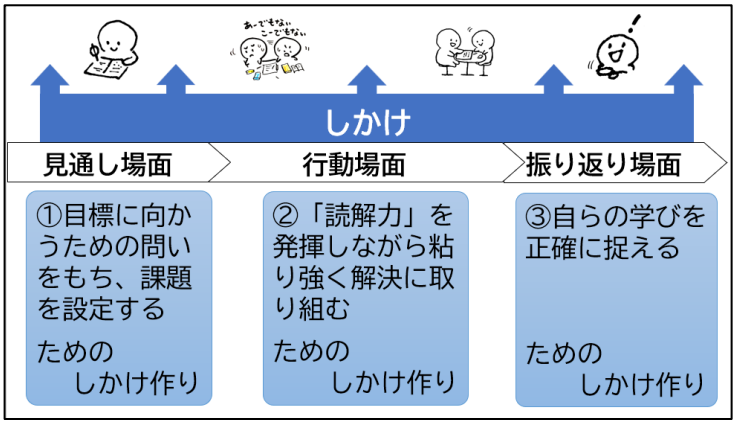

図１　しかけのモデル図

①見通し場面のしかけ

ポイント①：子どもが考えたくなるような課題（問い）を設定する

ポイント②：子どもが目標に向かえる学習計画を立てる

「見通し場面」では、子どもたちが考えたくなるような問いを設定したり、その解決に向けて必要な活動を考え大まかな計画を立てたりする。魅力的な問いや活動を設定していくためには、教師による子どもの実態把握と教材研究が大切である。その際、教師が問題を提示したり課題を与えたりする等、教師主導で問題や活動を設定してしまうのではなく、子どもたちの主体的な関わりを大切にする。

②行動場面のしかけ

ポイント①：子どもが読み取ったことを基に、自分の考えをつくりやすいテキストを用意する

ポイント②：子どもが読み取ったことを基に、学び合える場を設定する

「行動場面」では、子どもたちが「読解力」を発揮しながら互いに学び合い、課題を解決していく。ここでは、子どもたちが自分の考えを作り、互いに学び合えるような環境作りが大切である。そのためには、対話の仕方を指導し、互いに聞き合えるようにしていく。また、教師は子どもたちの主体的な活動を大切にしつつも、授業の方向性がずれないようにする、深い学びへ誘う、子どもたちの活動を価値付けることが重要である。

③振り返り場面のしかけ

ポイント①：振り返りの視点を設定する

ポイント②：子ども自身で振り返ることができるような方法を用意する

「振り返り場面」では、子どもたちが自らの学びの成果を捉え、次の学びへの意欲を高める。子どもたち自身で、分かったことをまとめたり、できたことを振り返ったりできるようにする。教師が主導して、本時のまとめを書くのではなく、子どもたち自身で振り返りができるようにしていく。

Ⅲ　研究実践

◆指標設定と達成に向けた取組み

①見通し場面のしかけを行った授業実践

１　（教員質問紙）　授業を行うにあたり、子どもたちが自分で問いを持てるように工夫していますか。

指標　　「①できている＋②どちらかといえばできている」の合計

５月調査 31% → 目標値 60% → 11 月調査 67%

指標の達成に向けた実践

１　第４学年社会科「大切な水を届ける水道事業」

（１）目指した子どもの姿の概要

なぜ水道を大切にする必要があるのかについて疑問を持ち、友達と話し合いながら水がどのようにして自分たちのところまで来ているのかを調べ、県内外の人々の協力とそれを実現してきた人々の努力を捉え、これからも水道を大切にしようとする。

（２）子どもが考えたくなる課題（問い）を設定するためのしかけ

単元前半で水源について調べる活動によって、香川県ではため池を作る等、昔から水を確保するために様々な努力があったことを理解できるようにした。子どもたちは、調べ活動を通して、香川県では現在までに多くのため池やダムが作られ、合計で約３億 6000 万㎥の水をためることができるようになっていることを理解していった。

ここまで学習を進めてきた子どもたちに、授業の導入において、山に長いトンネルを掘って徳島県から水を運んでいることを知らせた。ため池やダムによって十分に水を確保していると考えていた子どもたちは、「なぜ県外から水を運んでいるのだろう」という問いを持ち、課題を解決したいという思いを強くした。（図２参照）

図 2　県外の水源について知る

２　第４学年理科「とじこめた空気と水」

（１）目指した子どもの姿の概要

ペットボトルロケットの飛行を観察することで空気と水の性質に関する気付きや疑問を持ち、自分なりに根拠のある予想を立て、実験を行う。実験結果を基に、科学的な見方・考え方を働かせて、閉じ込めた空気と水の性質について、理解し、表現する。

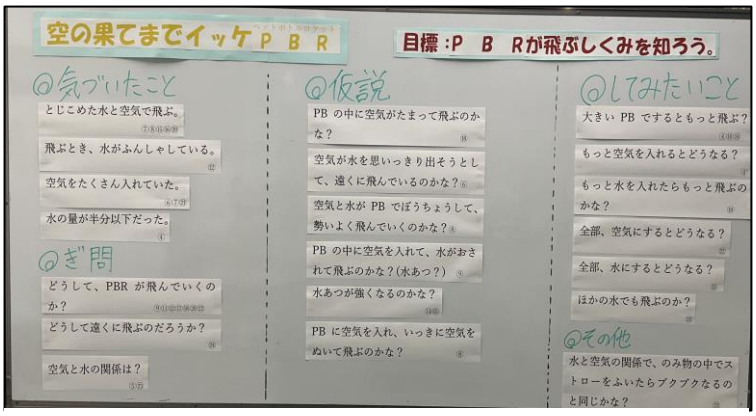

図 3　子どもたちの疑問から作成した計画

（２）子どもたちが目標に向かえる学習計画を立てるためのしかけ

ペットボトルロケットが飛行する様子を見せ、「気付いたこと」や「疑問」等を自由に発表し、それらを教師がまとめて、おおまかな計画を作成した。子どもたちは、ペットボトルロケットが飛ぶ仕組みを明らかにするために、解決しなければならないことを意識し、疑問を解決できるように学習を進めていった。(図３参照)

②行動場面のしかけを行った授業実践

２　（児童質問紙）　本や資料等から分かったことを、文章で書いたり、発表したりするなど、自分の言葉で表現していますか。

指標　　「①できている＋②どちらかといえばできている」の合計

５月調査	→	目標値	→	11 月調査
45%		50%		51%

指標の達成に向けた実践

１　第６学年社会科「大昔へタイムスリップ！　『国づくりへの歩み』」

（１）目指した子どもの姿の概要

縄文―弥生―古墳時代の中から、どの時代で１か月間暮らしたいかを選ぶという問いを持ち、各時代の衣食住を調べ、時代ごとに比較するという課題を設定して、各時代の食事や衣服、建物、道具等についてまとめたテキストを使って調べ、話し合う活動を通じて、３時代について理解し、それぞれの時代の長短について捉えようとする。

図 4　縄文・弥生時代の遺跡を見比べる

（２）読み取ったことを基に、自分の考えをつくりやすいテキストを用意する

本実践における課題（問い）は「米作りは、人々の生活にどんな影響を与えたのか」である。この課題を子どもたちが「読解力」を発揮しながら解決するためには、読み取るべきテキスト（文章や表や図）が必要である。本実践で用意されたテキストは、縄文時代と弥生時代の遺跡の航空写真である。（図４参照）子どもたちは、縄文時代と弥生時代の遺跡にはいろいろな違いがあることに気付き、米作りが始まったことで変化したことを捉え、ほかにどのような影響が見られるか、両時代の遺跡を見比べながら考えていった。

２　第５学年国語科「作中人物の人物像を深めよう　『注文の多い料理店』」

（１）目指した子どもの姿の概要

物語を読み「どのように人物を描いているのだろう」という問いを持ち、登場人物の性格や心情を叙述をもとに捉える。友達との対話を通して多様な読みを受け止め、これからも、新たな作品の魅力に気付き、よりよい読書生活を送ろうとする。

（２）読み取ったことを基に、学び合える場を設定する

本実践における課題（問い）は「塩をもみこむ指示があるまで食べられることに気づかなかったしんしの人物像について考えよう」である。テキストとして用意されたものは、一文ごとに番号を振り、一つの場面を一覧できるよう編集された文章である。全文があることで、文を行き来しながら読み、叙述と自分の経験とを合わせて考えることで、登場人物の性格を考えていった。（図５参照）

図 5　自分の経験と叙述を合わせて考える

読み取った人物像について班で話し合う際には、文の番号によって友達の考えと比較しやすくなり、子どもたちは、自分の考えを再構築することができた。

３　第３学年理科「音の原因を突き止めろ！！　～音の性質～」

（１）目指した子どもの姿の概要

ストロー笛遊びを通して、音についての疑問を持ち、実験から、音が出ているとき物は震えること、音が伝わるとき音を伝えるものは震えていることを捉える。

（２）読み取ったことを基に、学び合える場を設定する

本実践の課題（問い）は「音が出るとき、ほかの物も震えているのだろうか」である。用意されたテキストは、表の形にまとめられた全ての班の実験結果である。

まず、音が出ているものは震えているかどうかを確かめるために、実験が行われ、前面白板に掲示された実験結果をまとめる表に、全ての班の結果をまとめていった。

この実験結果を見ると、全ての班で音が出ているときに丸印がついている、つまり震えていることが分かった。時間を充分確保し、「つまり」や「このことから」という言葉を使うという共通理解の基、子どもたちは班で話し合いながら考察し、「音が出ているとき物体は振動する」という結論を得た。（図６参照）

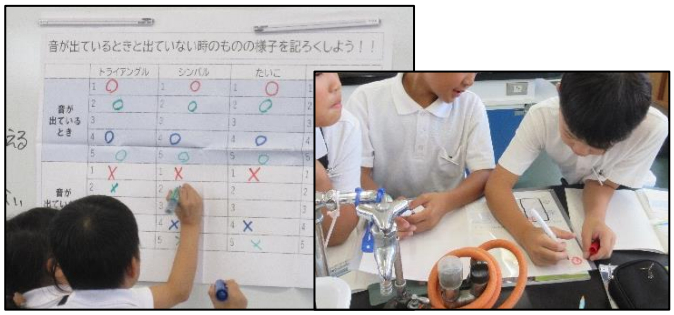

図６　実験結果をもとに考察する

③振り返り場面のしかけを行った授業実践

３　（教員質問紙）　授業中に、子どもたちが自分でまとめを書くなど、自分で学びを振り返る時間を確保していますか。

指標　　「①できている＋②どちらかといえばできている」の合計

５月調査 15% → 目標値 60% → 11 月調査 67%

指標の達成に向けた実践

１　第２学年算数科「水に使えるものさしがある?!」

（１）目指した子どもの姿の概要

直接比較ができない場面設定で、どうしたらかさを比べられるのかという疑問を持ち、普遍単位の必要性を理解していく。実物を用いながら、単位ごとの量感を理解することで、適切な単位を選択してかさを表すことができるようになる。そして、身の回りのかさについても興味を持つようになる。

（２）振り返りの視点を設定するしかけ

本実践に限らず、第２学年では、右のような振り返りの視点を常に子どもたちに示し、何について振り返るのかを明確にした。（図７参照）振り返る経験を積むことができるように、時間を保証するとともに、これらのすべての視点で、毎時間振り返るのではなく、振り返るべきタイミングで振り返るべき視点を教師が示すことで、本時に関係のある内容について振り返りを記述することができるようにした。

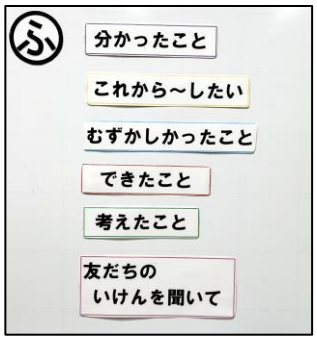

図７　振り返りの視点の例

視点が常に示されていることで、振り返るべき視点に子どもたちが慣れていくとともに、授業中も友達の意見を聞いて、自分はどう思ったかを意識しながら学習に臨むことができた。

◆特徴的な取組み

ドリル活動

4　（教員質問紙）　特定の教科だけでなく、学校の教育活動全体で、読解力向上に向けて意識して取り組んでいる。

指標　　「①よく行っている＋②どちらかといえば行っている」の合計

5月調査	→	目標値	→	11月調査
30%		60%		67%

1　朝のドリル活動における基本的学力の向上

本校では、週２回、８：15～８：30 の時間に、ドリルタイムを設定している。その時間に、子どもたちが基本的な学力を身に付けることができることを目指してドリル学習を行った。

（1）視写

教科書の特定の文章を視写する活動を行った。子どもたちは、「指定されたページを開く」、「文節に句切りながら読んで書き写す」、といった活動に慣れ、素早くできるようになっていった。

（2）　語彙の獲得

１・２年生「言葉集め」	３～６年生「子ども新聞意味調べ」
３分間で「『あ』がつく言葉」等テーマに沿って言葉を思いつくだけ書く。その後、全体交流をして自分が思いつかなかった言葉を書き足す。	10 分間で子ども新聞の特定の記事を読み、分からなかった言葉を国語辞典で調べ、意味を書き出す。

これらの活動により、少しずつ語彙が増え、素早く国語辞典を使うことができるようになってきた。

2　学びの土台作り

子どもたちが学び合うためには、互いの考えを聴き合うこと、相手に伝わるように話すことが土台となる。これらの土台を作るために、図８のような話し方や聴き方を指導することを、年度初めに教員間で共通理解するだけでなく、全ての教室に掲示し、子どもたちに説明した。

図 8　教室に掲示されている話し方、聴き方

全ての学年で、10 段階へ到達することを目指すのではなく、１年生は３段階まで、２年生は４段階まで、３年生は７段階まで、４年生は８段階まで、５・６年生は 10 段階までの到達を目標とすることを共通理解した。授業中には、「今、レベル３の話し方ができているね」「次は、レベル４の聴き方ができるようにしてみよう」等と声掛けをし、子どもたちがお互いに学び合えるようにするとともに、教師自身もこれらの話し方や聴き方をすることを心がけた。

Ⅳ　研究の成果と課題

【成果】

・国語科以外の教科における、「読解力」を発揮する授業の提案

「読解力」は、国語科の授業と関係が深いように思われた。しかし、社会科や算数科、理科においても「読解力」を発揮する授業を構想し、実施できた。図９が、今年度実践できた公開６授業の概要である。

学年・教科	解決すべき課題	テキスト
５年・国語	登場人物の人物像	物語の全文（一覧可能な状態にしたワークシート）
６年・社会	米作りが人々に与えた影響	縄文・弥生時代の様子を伝える遺跡の写真（想像図）
４年・社会	県外から香川県に水をもってこなければならない理由	水の使用量の変化のグラフと香川県の水に関する年表
２年・算数	単位量同士でかさを計算する理由	水のかさを示す図および考え方を示すヒントカード
３年・理科	音と物体の振動の関係	すべての班の実験結果をまとめた表
４年・理科	閉じ込められた空気の体積と反発力の変化を予想	前時の経験

図 9　2025 年度の実践授業の概要

・見通し場面において、子どもたちが「考えたい」と思えるようなしかけの開発

見通し場面で、子どもたちが既習との違いを感じたり、魅力的な教材と出合ったりすることで、以下のような要素を含んだ学習課題（問い）を設定することができる。

・新奇性：「考えたことがなかった」という問い
・多様性：「さまざまに考えたり答えたりすることができる」問い
・適度な困難度：「分かりそうで、分からない。できそうで、できない」という問い

また、子どもたちと学習計画を立てておき、学習の見通しを持っていることも問いに向かう意欲形成のために有効であった。

・行動場面において、子どもたちが読み解きたくなるようなテキストの選定

複数の教科でテキストを使って問題（課題）を解決する授業を行った。（図９参照）また、文章の読み方や注目すべき叙述の見つけ方等、図等の見方を丁寧に指導することも重要である。

【課題】

・日常的な授業改善

「読解力」を育成するためには、一授業や一単元だけでは不十分である。子どもたちのアンケートでも、「授業や普段の生活で、分からないことについて、様々な本や資料等から調べようとしていますか。」や「本や資料等から分かったことを、文章で書いたり、発表したりするなど、自分の言葉で表現していますか。」といった質問項目における肯定的回答率は半数程度にとどまっている。

普段の授業から、子どもたちが「読解力」を発揮する機会を増やしていきたい。

そのために、児童の学びの集団づくりや教師一人一人の力量を高めることで、学びの基盤を強固なものとすることにも取り組む。

・行動場面のしかけの質の向上

テキストがあっても内容を正しく読むことができない児童、テキストを使って自分なりの考えを作るのが難しい児童等の姿が見られた。全ての子どもがテキストを読み、自分なりの解を作り出し、友達と話し合うことで、吟味できるようにしていきたい。そのためには、よりよいテキストを選定し、それらを使って考えるしかけを充実させていく必要があると考える。

・「読解力」について振り返る活動の充実

授業の振り返り場面において、本時の学習を振り返るようにしたが、「分かったこと」や「これからしたいこと」等、学習全般に関する振り返りが多くなった。行動場面で自分が「読解力」を発揮できたかどうか、友達とテキストを読み解いたことを話し合えたかどうかを振り返る等、「読解力」に特化した振り返りを開発していきたい。